

『美味おいしい話はなし』

作者 浅羽一

初めて入ったラーメン屋は、店の真ん中に白いピアノがでんと置いてある所だった。「いらっしやいっ。お好きな席へどうぞーっ」

思わず足を止めて呆然としていた所へ、店の奥にあるカウンターから威勢の良い声が飛んでくる。え、と戸惑いながらもさして広くない店内を窺うと、ピアノの周りを囲むように配置されたカウンター席やテーブル席に着く客は皆、まるで気にした風もなく音を立てながらラーメンを食っていた。

(…何だ此処。って言うか、何でピアノ?)

ごく当たり前の疑問であるはずなのに、どうしてなのか、食欲をそそる醤油ダレの香りと共に漂う空気感は、あたかもそんな疑問を抱くことこそが不自然であるかのようなものだった。

とりあえず、と言うか仕方なく、入り口に最も近いテーブル席へと腰を下ろした。冷静に考えれば、さっさと引き返して店を出ると言う選択肢もあったのだろうが、昼から何も食べていなかった上に、すでに鼻と胃袋を人質に取られていた身で今さら他の店を探す気にはなれなかった。

間もなく、アルバイトらしき若い兄ちゃんがグラスを持ってやって来て、「ご注文は?」。

注文はすでに決まっていた。「ラーメンを、一つ」。どの客のテーブルを見ても、一様にシンプルな醤油ラーメンが置かれていた。

「はいよ、ラーメン一丁っ」

兄ちゃんは元気よくカウンターの向こうにいる店主へと叫びながら、自らもそちらへと戻っていった。やはり、と言うべきなのかどうなのか、店内を歩き回る上では明らかに邪魔としか思えないピアノを意識している様子は皆無だった。

(変な店に入っちゃったな)

狭いテーブルの端に置かれた水差しを取って、セルフサービスで水を注ぎながら、溜息を吐いた。

(まあ、良いや。とにかく、さっさと食って仕事に戻らないと)

実を言うと、あまり時間に余裕はないのだ。朝からいきなり先日納品したばかりの空調機器に不良箇所があったとクレームが入り、先方のオフィスまでわざわざ謝罪に出向いていた。そして、そのまま新品への交換作業に立ち会い、さらに実際に工事を行った人間から不良の原因を細かく聞いて、その詳細を今度は会社に戻って間違いなく不機嫌な上司へと報告しなければならぬ。

改めて今日一日の流れを思い返すと、また勝手に溜息が漏れた。営業主任なんて名ばかりの、実質は単なるクレーム処理係だ。他の部署へ転属になった先輩が、後釜に据えられたこちらへと苦笑混じりに「頑張れよ」と言っていた意味を、最近になってようやく実感していた。

「はいよ、お待ちっ」

と、突然に目の前へ器を置かれて、はっと我に返る。見上げた先には、例の兄ちゃんが「ごゆっくりどうぞ」と満面の笑みを浮かべていた。

会釈をして去っていく兄ちゃんを見送ってから、かぐわしい湯気を立ち上らせているラーメンへ意識を移した。具はメンマに、ナルトに、海苔に、チャーシュー。麺は細めのストレートで、スープの色は鮮やかな琥珀色。本当に、見事なくらい典型的な醤油ラーメン

だった。すでに分かっていたことであつたものの、店内の光景を考えたら、その普通さはむしろ違和感を抱かせるものだった。

(何にせよ、問題は味だよな)

竹製の筒に無造作に突っ込まれている割り箸を一膳取って、ぱきりと割る。それから、まずは器に備え付けのレンゲを使って、スープを一口…。

…啜った直後、意識せず全身を固まらせた。

余計な表現は一切要らない。ただ一言、美味かつた。

気付けば、行儀なんてまるで忘れて一心不乱にラーメンを食っていた。大げさでも何でもなく、呼吸をする間も惜しかった。

ようやくちゃんと息が出来たのは、器の中から固形物が全て消えた後だった。そして俺は大きく深呼吸をすると、一度も口を離すことなく、残ったスープを飲み干した。

「……………」

器を置いてから、しばらくの間、半ば放心状態で椅子に座っていた。口から吐き出される息までもが、素晴らしい香りを纏っていて、出来ることならこのままずっと息を止めていたいとさえ思った。

信じられなかった。たった今、自分が一瞬にして平らげたものは、一体何であるのだろうかと本気で考えた。

特別な味付けでは、おそらく無かつた。と言うよりも、外見同様、やっぱり中身も醤油ラーメンだった。ただ、その枕詞として「究極の」…いや、そうではなく、「本物の」が使われる。

これが、これこそが、真の醤油ラーメンだと思った。これと比べれば、自分が今までに食べていたラーメンなど、塩っ辛い色水に細長い食用粘土を浸されているだけのようなものだった。

時間の有無何て関係ない。とにかく二杯目を頼もうと腕を上げた、その時だった。

「すいませーん」

ピアノの向こう側の席にいた客が、すっと手を挙げて店員を呼んだ。此処からではよく見えないが、どうやら工事現場などで働いていそうな男だった。

「はい、はい」と、すぐに兄ちゃんが奥から現れた。そして客に負けない元気な声で「支払いはどうします?」。

何だ、言い方は悪いがこんな大衆的なラーメン屋のくせに、カード払いも受け付けているのかと、少しばかり驚いた。

けれど本当に耳を疑ったのは、その直後だった。

「それじゃ、ピアノで」

…一瞬、思考が止まった。

だが、他の客に戸惑っている様子はなく、彼らは相変わらず自身のラーメンの味わいを堪能していた。あんな大声、聞こえていないはずがないのに。

「はい。じゃあ、どうぞ」

「どうも」

わけが分からないこちらを余所に、店員と客のやりとりは続いていて。やがてピアノの椅子に腰を下ろして蓋を開けたのは、色褪せた金髪に汚れたシャツとニツカボツカと言う

格好の男だった。正直、お世辞にもピアノを弾けそうな人間には見えなかった。

しかし、ややあつて生み出された音色は、またしても耳を疑いたくなるものだった。ずるずると麺やスープを食べる音が重なる中、あたかも深夜の宮殿で大理石の廊下に重たいボールが跳ねたような響きを皮切りに、まるで場違いな演奏が店の中心で繰り広げられた。

(…これって、ショパン?)

こんがりと日焼けした荒々しい指が、繊細かつ大胆に真つ白な鍵盤の上を躍る。滑らかに、緻密に、優雅に、華やかな音で空間を塗り込めるように紡がれる旋律は、まさしく「ピアノの詩人」、フレデリック・フランソワ・ショパンの〈幻想即興曲〉だった。

……これは、現実なのだろうか。頭の中で、声にならない疑問がぐるぐると回った。見事な演奏だった。はつきり言つて、そこら辺のプロと比較しても引けを取らないだろう。それも、勝手な偏見と言われればその通りだけれど、弾いているのはあんな肉体労働者風の男だ。

悔しいが、せっかく入った音大を卒業する前に己の限界を悟ってから、早十数年。今の自分よりもあの客の方がきつと遙かに上手かった。

五分足らずの演奏は終わり、再び店内はラーメン屋らしい音の重なりに占められる。

果たして、ピアノの蓋を閉じた男は誇る風でもなく、至つてあっさり立ち上がり、それから「どうでした、大将?」。

声を向けられた方へ視線を移すと、カウンターの奥から店主らしき男が顔を覗かせていた。

「オツケー、合格」

店主は満足そうで、それを見た店員の兄ちゃんも全てオツケーとばかりに、「じゃ、そう言うことで」。

あまりと言えば信じがたい話だったものの、どうやら、あの演奏が本当に代金の代わりにらしいと悟ったのは、にっこり笑った客が「ごちそうさま」と店を出て行つてからだ。その頃にはもう、店員の兄ちゃんは何事もなかったかのようにさっさとテーブルを片付け始めていた。

「あれ、もしかしてお客さん、うちは初めて?」

と、不意に声を掛けてきたのは、カウンターに肘を突いた店主だった。

ピアノの音よりも良く通る声に、反射的に「あ、はい」と頷くと、店主はにやにやしながら「うち、ちよつと変わつてる店だろ」と、壁に貼られたポスターの一つを指差してきた。そこには、またしても理解しがたい内容が書かれていた。

「ラーメン一杯、十万円。ただし、ピアノの演奏で店主を納得させられたら、全部タダ!」  
「十万?」

思わず叫んだこちらに、店主を始め、店員も他の客も皆「何を今さら」と言う風な顔をした。

(いや、確かに、信じられないほど美味かったけど。だからって、十万は幾ら何でも…) せいぜい千円か、高くても千五百円くらいだとばかり思っていた。

しかし店主はそんなこちらの思考を見透かしたみたいに、「店の表にもちゃんと張り紙してるんだけど、見なかった?」。

「それは…」

言われてみればあった気もするが、そもそもラーメン一杯の値段なんて、いちいち気に留めていなかった。

「何にせよ、払って貰うよ。他のお客さんも、みんなそれで納得してくれてるんだから。」

「いや、でも」

言うまでもないが、そんな持ち合わせはない。

すると店主は、やはりそれさえもお見通しだったのか、「勿論、ピアノで払ってくれても良いけどね」。

「……………」

…自信があったわけじゃない。ましてや、直前にあんな演奏を目の当たりにしたばかりなのだ。要するに、ダメ元でも挑戦するしかなかっただけだ。願わくは、合格基準がもっと低レベルであらんことを。

ふと気付くと、周囲の人間の視線がこちらへと集中していた。一見の客がどんな演奏を披露するのか興味津々といった感じた。気にせずラーメンでも食ってくれと言いたかったが、何となく負けみたいに思えて、ぐっと我慢した。

ピアノの前に座ると、店員の兄ちゃんが「どうぞ」と数枚の楽譜を差し出してきた。

「今日の課題曲です。この中から好きなのを一つ選んで弾いてください」

「え、自由じゃないの？」

「それだと、みんな得意な曲ばかり弾くでしょ。そうしたら、うちも商売上がったりですから」

確かに、ごもつとも。

改めて楽譜を見ると、そこには先ほどのショパンに加え、バッハにリストにドヴォルザークにベートーヴェンにドビュッシー。

「…幅広いですね」

「選択肢は多い方が良いでしょう」

「例えば、軽く練習とかって」

「一発本番です」

「……………」

「で、どれにします」

「……………じゃあ、ショパンの幻想即興曲で」

どの曲もかつては一通り練習したもののばかりだったけれど、今の自分にとっては何れも選んでも似たり寄ったりだろうから、だとすればつい先ほどに聴いたばかりでまだ辛うじて耳に残っている曲を選ぶのが最善だろう。

「はい、どうぞ」と楽譜を差し出してきた兄ちゃんの顔は、やっぱりなどでも言いたげなものだった。

深呼吸を数回。何とも言えない緊張感は、音大受験のピアノ審査を思い出させてくれた。それでもガチガチにならずに済んだのは、鼻腔をくすぐるラーメンの残り香のおかげだ。

久しぶりに触れた鍵盤は、硬くて、ほんのり温かくて、ああ、自分はこの感触が何よりも好きだったんだなど、手首から先がかったの日々を懐かしんでいるのを感じた。根拠もなく、今なら昔のままに演奏出来そうな気がした。

力を抜いた左手をゆっくりと持ち上げ、それを静かに落とし……跳ねるように、鍵盤を叩いた。

響き渡るオクターブの重なり。そして、その余韻が今にも消えそうになった瞬間、ゆっくりと滑り出すように、やがて間もなく何処か感傷的で、或いは感情的な旋律の幕が上が……そのまま、ほとんど呼吸も忘れて一気に駆け抜けていく。

良し、と内心で喜んだ。ブランクの割に出だしはまずまずだった。勿論、全体的な速度を始め、全盛期に比べると粗は幾らでもあるだろうが、それでも曲そのものの雰囲気はそれほど悪くないはずだった。

妖艶さと繊細さが、時に互いに顔を背けつつも、決してその手を放すことなく、華やかな舞台の上でぐるぐると踊るような前半部分。

と、場面は変わり、今度は一転してロマンチックな旋律が現れる。それは諭えるならば、激しい愛に身を焦がしていた男女が、ほんの束の間、ようやく許された二人きりの瞬間に、とても穏やかに相手の温もりを感じ合い、複雑で、だけど本質は一途な想いをそつと耳元に囁き合うかのような、甘い夢を見ている時間だ。

かつて、大学の講師からは聴いているよりも、弾いているの方が心地よくなりやすく、感情を込めながらも演奏者としてのバランスを保つことが重要だと教わった。それはあたかも異なる左右の手の動きを美しく調和させなければならぬことと同じように。

けれど、この曲を弾くたびに、そんな理性はまるで、愛し合う男女を数字と記号で分析しようとする学者じみた感覚みたいに思えてしまう。

だって、誰だって一度くらいは、正論や理屈を全て無視して、ただひたすら本能の命じのままに唯一絶対の愛の中で溺れてみたいと、そんな妄想を馬鹿馬鹿しいと思いつつも心は何処かで密かに抱いてしまうものではないだろうか。

だとすれば、まさしくこの曲はそんな幻想を現実のものと錯覚させてくれる。そして、いみじくも現実には、砂糖を練り固めたように単調な甘さだけで構成されているわけではない。

場面は再び変わり、曲調はまたしても互いの愛の深さを確かめようとするかのごとく、手の筋肉に無理を強いるものとなる。だが、もうすでに完全に魂を恋愛に捕らわれた者にとつては、そんな高速の試練さえも情熱の炎を大きくさせる快感に思えて――。

――右手の指が音を外したのは、もう後少して曲が終わろうかという時だった。

「あ……」  
と、思わず本当に現実の壁にぶち当たったみたいなのに、ほんの刹那であつたけれど、動きを止めてしまう。

「……」  
「……」

ようやく、演奏を終了した時、声も出なかった。勿論、それは失敗して大金を失ってしまったことも一因であつたけれど、それよりも何よりも、ただただ単純に悔しかった。

「やるねえ」

と、やがて店主がパチパチと手を叩いてくれた時も、苦笑こそ浮かべられたものの、喜びなんて微塵も湧いてこなかった。

だからこそ、「でも、失敗だね」と続けられても、最早、抵抗する気も起きなかった。

ほとんど音も立てずに、ピアノの蓋をゆっくりと閉めた。

「残念だったね。途中まで良かったのに」

「：いえ」

「でも、まあ、ルールはルールだからさ」

「分かってます」

仕方ない……。こうなったら、貯金を崩してでも払ってやるしかない。

だが、そんな覚悟を決めた所へ届いてきたのは、思いがけない言葉だった。

「と言いたい所だけど、内容自体は悪くなかったし、初めてのお客さんだしね。良いよ、今日のはツケ、って言うか宿題ってことで」

「え：」と店主の顔を見ると、彼はラーメン屋の主人らしいはつらつとした顔で、「懲りずにまた来てよ」と言った。

「：良いんですか」

「勿論。あ、今度来る時までには、うちのCDでも聴いて、大体の合格基準も知っておくと良いさ。何だったら、宿題の分の曲はその中から選んでくれても構わないし」

「CD？」

問い返すと、店主はカウンターの端を指差して「ほら、あれ」。

確かに、そこには何種類かの音楽CDがそれぞれ何枚かずつ綺麗に積まれていた。

「折角なんで、うちの常連さんの演奏を録音して、ある程度貯まったらCDにしてるんだよ。何せ、常連さんはみんな上手いからね。おかげで、こっちはいつもタダ働きさ」

そう言って肩をすくめる店主に悲愴さは皆無だった。ああ、だからこの人の作るラーメンは旨いのだと、何故だか素直に納得出来た。

「で、どうする？アルバム一枚、三千円だけど」

言うまでもない。マイナス十万円と、マイナス三千円（プラスCD）のどちらが得かなんて、小学校の低学年でも分かる問題だ。それに、自主制作のCDとしては割高感もあるが、あの演奏レベルのアルバムであれば損じゃない。

俺はとりあえず最も手近にあった〈MEN（麺）のクラシック〉シリーズの〈1〉を手に取り、財布から三千円を渡した。男性常連客限定のコンピレーション・アルバムらしく、店内の写真を用いたジャケットの裏には、トラック毎の曲名に並んで、一貫性のまるでない演奏者の年齢・職業のみが記載されていた。

「毎度どうも」。店主は代金を受け取ると、楽しそうに「次はもうちよい練習してきなよ」。

「頑張ってください」。これは店員の兄ちゃん。

それからさらに、変な仲間意識でも芽生えたのか、他の客からも口々に「頑張れよ」、「次は大丈夫だって」、「しっかり練習しろよ」：等々。

もしかして、こいつら全員、自分よりも上手いのかと思ったら、何だか無性にピアノが弾きたくなってきて。

（：本当に、面白い店だな）

俺は知らぬ間に緩んでいた頬を自覚しつつ。

「ごちそうさまでした」

妙に清々しい気持ちで、そう言った。

「って言う店があつてさ、もう本当に最高なんだって。味だけじゃなくて、常連客の演奏も含めてさ」

後日、例のラーメン屋のことをたまたま電話を掛けてきた友人に教えてやると、そいつはまるで驚いた様子もなく、『知ってるよ』。

「え？」

『白いピアノのある店だろ。ってか、店には行ったことないけど、インディーズのCDとしちゃわりと有名だからな』

「そりゃそうだろ、あの完成度だぜ。まあ、あのラーメンをいつでもタダで食えるとなつたら、下手くそな奴らも必死で練習する気は分かるけどさ」

言いながら、ちらりと自室の片隅に目をやる。実を言うと、あれからたびたび通うようになり、今のところ勝率は五分五分で、失敗するたびに次の「宿題」用に新しいCDを買ってきているのだけれど、そんな事実はわざわざ話す必要もない。

そして俺はいかにも「常連客」っぽく、「まあ、もしも時間があったら、お前も連れて行ってやるよ。勿論、俺の奢りでな。それとも、お前もCDを買って勉強するか？」。

すると友人は、心の底から嬉しそうに感謝の気持ちを告げてくる……かと思いきや、あろう事か呆れた風に『お前、まんまと引っかかっているな』。

「…は？」

いきなりの指摘に返す言葉を失っていると、そいつはまたしても溜息混じりに『有名だつて言っただろ』。

「…何の話だよ」

『演奏に失敗したら、CDアルバムを一枚買わせて、最高の演奏、つまり売り物になるほどの演奏は、録音して次のアルバムに使う。しかも、タダでな。第一、自主制作のCDの経費なんてたかが知れているだろ。それを、上達するまで何枚も三千元で買わされて。ラーメン一杯の値段としちゃ、そこらで行列を作ってる店と比べても倍以上だぞ』

「それって、要するに」

『店主のぼろ儲けって話だな』

「……………」

改めて言われてみると、確かに、冷静に考えればそいつの言うことはあながち間違っていない、と言うか、納得出来なくもない、いや、むしろもつともで…。

『まあ、美味しい商売だつてことだよ』

…なるほど、上手いこと言うな、と。

部屋の片隅に積まれたCDの山を眺めながら、心の底からそう思った。